農村振興を目指した交流事業における
地域住民のストレス分析
—山口県阿武郡阿武町宇生賀での草引き交流会において—

辻　　多　聞

要旨

山口県阿武郡阿武町宇生賀で 2014 年 6 月に実施された大学生と地域住民との草引き交流会において，交流会前，草引き作業終了後，交流会後の 3 回にわたって地域住民のストレス状況を日本語版 POMS 短縮版で調査した。6 つの観点で総じて一般的平均ないしそれよりも低い値を示しており，交流会の実施対して地域住民はストレスをほとんど感じていなかったと判断できた。「怒り」という観点では 3 回とも平均よりもかなり低い値を示しており，調査対象とした地域住民の大きな特徴と言える。

キーワード

農村振興，交流事業，地域住民，ストレス，日本語版 POMS 短縮版

1　はじめに

「活力ある農山漁村づくり検討会中間取りまとめ」（農林水産省，2014）において，「人口減少・高齢化の進む農山漁村で，住民の活動力が衰えている（中略）我が国の国土が荒れ，文化の伝統が途絶える事態は避けなければならない」とある。このように農村振興は現在の日本の重要な検討事項の一つとなっている。これをうけ農村振興の一環として，都市と農山漁村の結び付きの強化及び都市住民の多様なライフスタイルの選択肢の拡大を狙った都市と農山漁村との交流が推進されている。

一方で 2000 年に文部科学省から発表された通称「広中レポート」には，大学生のキャリアの形成の重要性が示されるとともに，自主的活動をはじめとする正課外活動の積極的な捉え直しが記された（文部科学省，2000）。この流れを受けて全国の大学において正課外活動の支援に関する見直しが進められるとともに，正課外活動におけるキャリア形成について研究がすすめられている。例えば溝上（2009）は，授業外での活動とそれに伴う授業外学習が学生の学びと成長に資することの関係性について示唆している。また辻(2009)は，山口大学の正課外活動である「おもしろプロジェクト（学生の企画に対する資金支援を行う制度)」において，「かけがえのない体験」・「人格的成熟・自己確認」・「組織運営に関する学び」という 3 つの高度な学びを参加学生にもたらしたであろうことを示した。さらに辻（2011）は，「おもしろプロジェクト」の参加学生は「コミュニケーション力」，「実行力」の成長を自覚できるであろうことを示した。

都市と農山漁村との交流の推進と，大学おける正課外活動の推進とがあいまって，大学生が農村振興に寄与する事例が現在盛んになっている。例えば氏原（2013）は，高知県大豊町の一集落である怒田（ぬた）において，高知大学生がその集落での農産物の商品化に

取り組んでいる事例を紹介している。京都府亀岡市のすいたん農園では農村振興の一環として農業体験塾が開設されている（大西，2014)。その塾では土壌改良剤に竹炭を用いており，この手法は「亀岡カーボンマイナスプロジェクト」として京都学園大学，立命館大学，龍谷大学の学生たちが研究・実践に大いに関与している（亀岡市)。今後もますます農村振興に大学生が関係していくことが盛んになっていくと予想される。

農村振興がすすむことは農村地域からすると望ましい状況であろうが，一方で見知らぬ大学生が自分たちの地域にどんどん入ってくることを意味している。辻（2014）によると，学生受入地域からの感想の一文に「田舎作りの我が家へ，環境の違う学生達を宿泊させる事に，少々不安を抱いていました。学生たちに会うまではとても緊張していましたが…」とある。このことから，はじめての人との交流，地域の開放，交流イベントも含めた学生対応など，農村振興を目指した大学生との交流事業において，地域住民には少なくともある程度のストレスが生じていることが予想される。交流事業における地域住民のストレス状況をあらかじめ知ることは，地域の開放にあたっての地域住民の理解が得られやすくなるとともに，交流事業がより良い発展につながるであろう。しかし農村振興を目指した交流事業における地域住民の気分や感情の状況を示す研究例は見当たらない。本研究では，山口県阿武郡阿武町宇生賀で開催されている山口大学剣道部との草引き交流会を事例として，農村振興を目的とする交流事業における地域住民の気分や感情の変化からそのストレス状況を判断することを目的とする。

2 調査方法など

2.1 調査対象と交流プログラムの概要

2.1.1 山口県阿武郡阿武町宇生賀

阿武郡阿武町は山口県北部に位置し（図 1)，2010 年国勢調査によると面積 116.07m^2，人口 3,743 人となっている（総務省，2014)。阿武郡阿武町は海岸部に位置する奈古地区と宇田郷地区，及び内陸部に位置する福賀地区の 3 地区に分類される。宇生賀は上記 3 地区のうちの福賀地区に含まれ，標高約 400m の宇生賀盆地にその集落が形成されている。宇生賀の人口は 264 人（世帯数 119 戸）であり，65 歳以上の高齢者人口が総人口に占める割合である高齢化率は 44.7%と同時期調査結果である日本全体での 23.0%と比べても非常に高い（図 2)。主な産業は農業である。

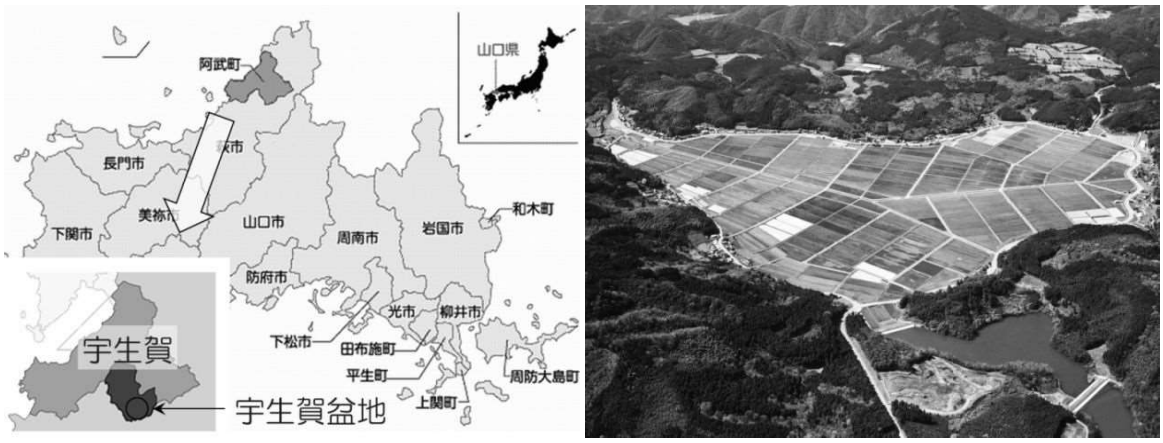

図 1　山口県における阿武郡阿武町宇生賀の位置とその外観写真

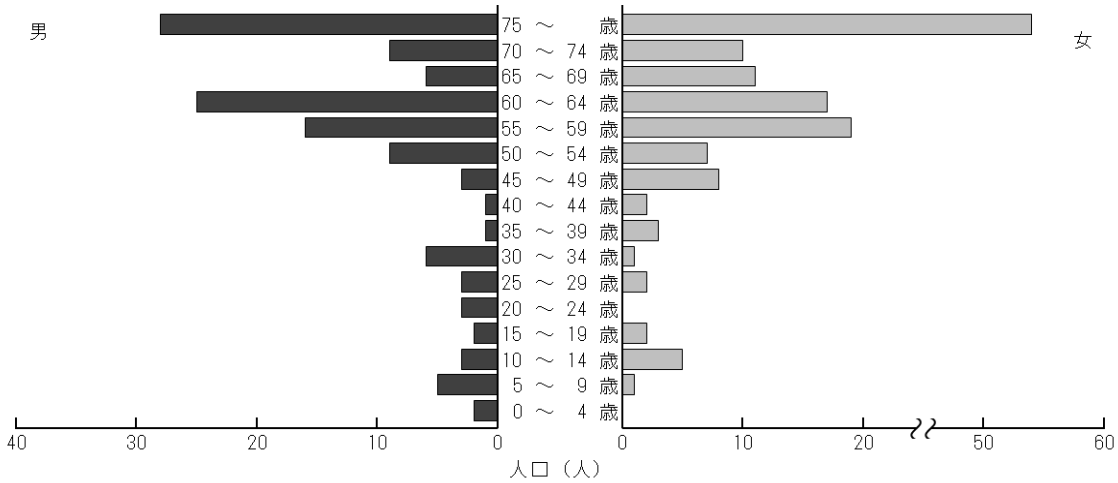

図 2　山口県阿武郡阿武町宇生賀の人口ピラミッド（2010 年国勢調査）

2.1.2　農事組合法人「うもれ木の郷」と「四つ葉サークル」

宇生賀では，その高齢化に伴い 1990 年に「明日の宇生賀を考える会」を発足し，宇生賀の見直しと再生の方向の検討を始めた。1996 年圃場整備の話が進む中，組合的な組織の必要を認識し任意組合「宇生賀農業生産組合」を設立，さらに翌年の 1997 年には地域営農体制の検討を進め，農事組合法人「うもれ木の郷」（以下，うもれ木の郷）を設立登記した。また法人の設立と同時に，組合員世帯の女性で組織するグループ「四つ葉サークル」が結成された。このグループは法人事業への協力を行うとともに，野菜や花等の生産，特産品の加工，地域の環境整備，及び消費者等との交流業務を担っている。

2.1.3　うもれ木の郷と山口大学剣道部との草引き交流会の概要

宇生賀に活力をもたらす他の施策として，うもれ木の郷のブランド米消費者との交流会である「収穫祭」が 1999 年から 2009 年まで開催された。しかしそのイベントへの参加人数は年々減少し，宇生賀が期待していたほどの農村振興の効果が得られなかった。「収穫祭」に代わる交流事業として 2012 年より「うもれ木の郷と山口大学剣道部との草引き交流会」（以下，交流会）が開始された。交流会の実施に至るまでには，地域・大学・学生の 3 者による打ち合わせが何度も行われた。うもれ木の郷の労働力不足及び宇生賀活性という地域のニーズと，剣道部の部活動費及び学生の地域交流に対する興味という学生のニーズとを，大学（教員）がマッチングした（辻，2014）。2012 年より交流会は年に 1 度 6 月に行われており，2014 年の 3 回目の交流会は 6 月 7・8 日に実施された。交流会の特徴は，水田内のヒエをはじめとする雑草を素手により除草する農作業が計 8 時間あること，地域住民と学生との夕食懇親会及びグループディスカッションを含む意見交換会が催されること，そしてうもれ木の郷組合員宅への民泊することの 3 点である。2014 年の交流会に参加した剣道部員は，3 年生以下の 35 名であった。本調査の対象とした 2014 年の交流会における各プログラムのスケジュールは表 1 のとおりである。

2.2 調査方法

2.2.1　ストレス測定

本調査におけるストレス測定には，日本語版 POMS 短縮版（金子書房，2005）を用いた（図 5，以下，POMS 短縮版）。POMS 短縮版は医学系の精神的変化の判断に頻繁に用いられているものである。例えば伊藤ら（2013）は，線維

表 1　2014 年度「うもれ木の郷と山口大学剣道部との草引き交流会」スケジュール

日付	時間	プログラム内容
2014/6/7	08:00	山口大学出発
	09:30	うもれ木の郷到着
	10:45	開会式
	11:00	第1回目農作業（11:50まで）
	12:00	昼食
	13:00	第2回目農作業（16:30まで）
	18:00	4会場に分かれて懇親会
	20:30	各組合員宅にて交流と民泊
2014/6/8	08:00	第3回目農作業（11:50まで）
	12:00	昼食
	13:00	うもれ木の郷と大学生の討論会
	16:00	閉会式（16:15まで）
	16:30	うもれ木の郷出発
	17:45	山口大学到着

筋痛症患者 18 名に対して森林セラピーを取り入れる有意義を検証するための指標の一つとして使用している。一般に POMS 短縮版やその原型である日本語版 POMS は過去一週間の気分状態をみる尺度であるが，実験介入前後の変化をとらえる尺度としても汎用されている（横山ら，2002)。POMS 短縮版では，記入用紙に記載された 30 の質問項目に対して「まったくなかった」から「非常に多くあった」の 5 段階評価で自身が回答・記入を行う。この回答結果より「緊張・抑うつ・怒り・活気・疲労・混乱」の 6 つの尺度で気分や感情の状態を簡便に判断することができる。回答時間がおよそ5分と短時間であることもPOMS短縮版の特徴の一つである。ただし POMS 短縮版は 30 項目すべてに回答しなければ解析が行えず無効回答となってしまう。POMS 短縮版の回答結果は，10 歳刻みの世代及び性別を考慮した T 値（横山，2005）に換算して解析をおこなった。T 値の 50 は，その世代及び性別での平均値を意味する。

2.2.2　調査対象者

調査対象者は，交流会に参加した宇生賀在住の男女計 24 名とした（表 2)。対象者は先に示すように宇生賀の高齢化に伴い全体の 3 分の 2 が 60 歳以上であった。有効回答率は約 75％であった。これは記入用紙（図 3）の文字及び記入欄が小さかったため，高齢者による回答に影響を及ぼしてしまったことが原因であった。データを取得するにあたって「国立大学法人山口大学における個人情報の取扱いに関する方針」(山口大学) に従い，研究の目的・内容・及びその公開方法について調査の事前に説明を行い，対象者全員より同意を得た。

表 2　調査対象者の年齢及び男女別分布

	男	女	計
40歳代	1	0	**1**
50歳代	2	5	**7**
60歳代	6	6	**12**
70歳代	0	3	**3**
80歳代	0	1	**1**
合計	9	15	**24**

2.2.3　調査実施日時

調査は 2014 年の交流会中に 3 回行った。第 1 回目の調査は交流会開始前である 6 月 7 日の 10 時,第 2 回目は初日午後の農作業終了後の同日 17 時,そして第 3 回目は交流会終了後である 6 月 8 日の 18 時とした。3 回の調査はいずれも調査対象者全員に対して行った。

図 3　日本語版 POMS 短縮版記入用紙
（原寸は A4 版，質問部分は修正）

3　調査結果及び考察

3.1 「緊張」に関して

この項目は得点が高いほどより緊張していることを示している。3 回の調査結果の中で数字として最も大きくなったのは交流会開始前で，47 であった。その後 2 回の値は 46，43 と，3 回すべての調査結果において一般的な緊張状態である 50 より低い値を示した。数字としての T 値は 3 回の調査の時間進行に応じて減少しているが，3 者に有意な差は認められなかった(p>0.05)。平均よりも常に下回り，かつその変動も認められないことから,「緊張」という観点において対象者は大きなストレスを感じていないと判断できる。今回の調査結果では 3 者に有意な差は生じなかったが，総じてイベントの開始前には緊張感が高まり，終了時にはその緊張から解放されるものである。本調査結果にもその片鱗を感じることもできなくもなく，追加調査の必要性があると思われる。同様の条件でのデータをさらに取得することにより,開始前と終了後の「緊張」に差が生じるのか，また生じる場合にはどの程度の変化があるのかなどといったことをより詳細に解析できるかもしれない。

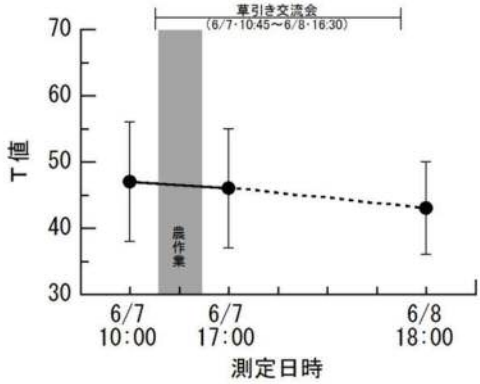

図 4　「緊張」に関する T 値の時間変化
最後の区間には様々なプログラム項目があり変化していることが予想されるため点線とした

表 3　POMS 短縮版「緊張」に関する各調査での T 値平均と標準偏差及び各調査間における相違

	① 6/7･10時	② 6/7･17時	③ 6/7･18時
T値平均	47	46	43
標準偏差	9	9	7
①との相違	−	n.s.	n.s.
②との相違	n.s.	−	n.s.
③との相違	n.s.	n.s.	−

3.2 「抑うつ」に関して

この項目は得点が高いほどより自信を喪失していることを示している。3 回の調査結果の中で数字として最も大きなものは，「緊張」と同様，交流会開始前に示した 46 であった。「緊張」と同様，3 回すべての調査結果において 50 より低い値を示し，3 者に有意な差は認められなかった(p>0.05)。このことから「抑うつ」という観点でも，対象者は大きなストレスを感じていないと判断できる。一般的に緊張感は自信喪失感の増加を誘発する傾向にある。交流会開始前に数字として最も大きくなっているのはそれを表している可能性も考えられるが，本調査のデータ数だけでは，「緊

張」と「抑うつ」の相関性を明言することはできない。

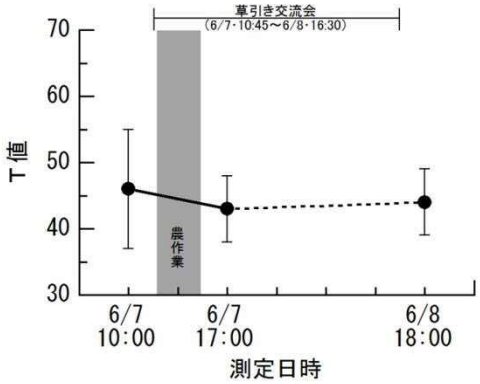

図 5　「抑うつ」に関するＴ値の時間変化
最後の区間には様々なプログラム項目があり変化していることが予想されるため点線とした

表 4　POMS 短縮版**「抑うつ」**に関する各調査での T 値平均と標準偏差及び各調査間における相違

	① 6/7·10時	② 6/7·17時	③ 6/7·18時
T値平均	46	43	44
標準偏差	9	5	5
①との相違	−	n.s.	n.s.
②との相違	n.s.	−	n.s.
③との相違	n.s.	n.s.	−

3.3 「怒り」に関して

この項目は得点が高いほどより怒りを感じていることを示している。3 回の調査結果はいずれも 40 前後であり,数字として大きな違いは生じなかった。また 3 者に有意な差は認められなかった (p>0.05)。このことから「怒り」という観点でも，対象者は大きなストレスを感じていないと判断できる。一般に怒りは何かの事象が生じ，それに対する主観的判断より芽生える。すなわち交流会前の値が対象者にとっての日常的な数値と考えてよいだろう。農作業をはじめとする交流会という事象が生じているが,それでもなお値は 40 前後と平均より大きく下回っている。図 6 の点線部において，交流会の様々なプログラムに応じて「怒り」に関する変動が生じている可能性も否定できないが，農作業後及び交流会終了後のT値平均がいずれも40前後であることから，その可能性は想像しがたい。こうしたことから，対象者は日常でも怒りの感情が芽生えることが少なく，また交流会という非日常的事象が生じてもそうならない非常に穏やかな集団であると思われる。

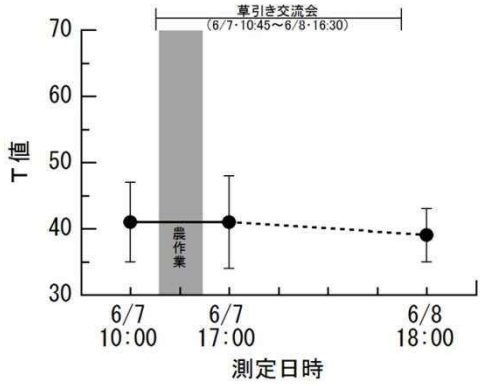

図 6　「怒り」に関するＴ値の時間変化
最後の区間には様々なプログラム項目があり変化していることが予想されるため点線とした

表 5　POMS 短縮版**「怒り」**に関する各調査での T 値平均と標準偏差及び各調査間における相違

	① 6/7·10時	② 6/7·17時	③ 6/7·18時
T値平均	41	41	39
標準偏差	6	7	4
①との相違	−	n.s.	n.s.
②との相違	n.s.	−	n.s.
③との相違	n.s.	n.s.	−

3.4 「活気」に関して

この項目は他 5 項目とは視点が異なり，得点が低いと活気が失われている，という見方をする。3 回の調査結果の中で数字として最も高かったのは交流会開始前に示した 49，一方で最も低かったのは交流会終了後に示した 45 であった。数字としては 3 回の調査結果は

時間の経過に対して減少傾向にあるように見えるが，3 者に有意な差は認められなかった（$p>0.05$）。いずれの値も 50 を下回っており，交流会によって地域に大きな活気がもたらされたという結果とはならなかった。一方で 3 者に有意な差が認められなかったこと，そして 50 を下回っているもののその下回りが小さいことから，少なくとも「活気」という観点でも対象者はストレスを感じていないと判断できる。3 者に有意差がないために平均値の数字としての変化による推測に過ぎないが，交流会前には若者が来るという期待や，草引きの労働力が緩和されるという期待などから，平常よりやや活気が生じた可能性を予想することもできなくもない。「活気」に関しても更なる追加調査が必要であると思われる。

3.5 「疲労」に関して

この項目は得点が高いほどより疲労感を感じていることを示している。3 回の調査結果の中でＴ値が最も低かったのは交流会開始前の 42 であった。その後の 2 回は共に 48 であった。「疲労」に関しては，交流会開始前の値とその後の 2 回の値の間には有意な差が認められた（$p<0.05$）。すなわち交流会開始前よりも疲労感が増したことを意味している。農作業という労働及び若者と交流することが，疲労感を増加させた要因であることは間違いないだろう。しかし 3 者の値はいずれも平均である 50 を下回っている。対象者にとって除草をはじめとする農作業は普段より従事していることである。また開始年である 2012 年のデータを取得していないために明言することは

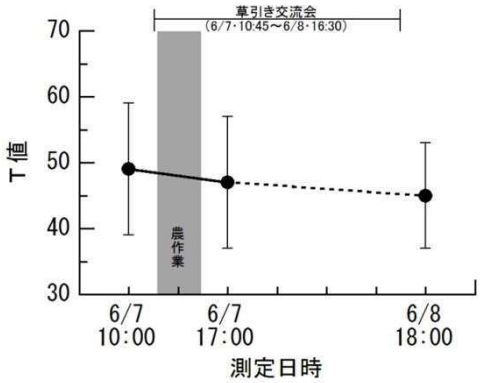

図 7　「活気」に関するＴ値の時間変化
最後の区間には様々なプログラム項目があり変化していることが予想されるため点線とした

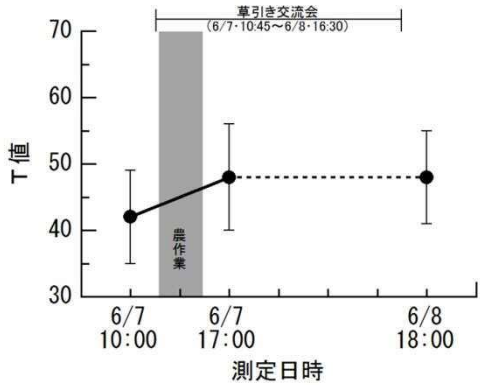

図 8　「疲労」に関するＴ値の時間変化
最後の区間には様々なプログラム項目があり変化していることが予想されるため点線とした

表 6　POMS 短縮版**「活気」**に関する各調査での T 値平均と標準偏差及び各調査間における相違

	① 6/7・10時	② 6/7・17時	③ 6/7・18時
T値平均	49	47	45
標準偏差	10	10	8
①との相違	－	n.s.	n.s.
②との相違	n.s.	－	n.s.
③との相違	n.s.	n.s.	－

表 7　POMS 短縮版**「疲労」**に関する各調査での T 値平均と標準偏差及び各調査間における相違

	① 6/7・10時	② 6/7・17時	③ 6/7・18時
T値平均	42	48	48
標準偏差	7	8	7
①との相違	－	*	*
②との相違	*	－	n.s.
③との相違	*	n.s.	－

出来ないが,若者との交流も 2014 年は 3 回目であるためある程度の「慣れ」があったと思われる。こうしたことが平均である 50 を下回った結果につながったと思われる。交流会の実施（農作業の実施）により日常と比較して疲労感は生じているが,平均である 50 を下回っていることから,「疲労」という観点でも対象者は大きなストレスを感じていないであろうと予想される。

3.6 「混乱」に関して

この項目は得点が高いほど，混乱したり，考えがまとまりにくくなったりしていることを示している。3 回の調査結果の中で数字として最も高かったのは,「緊張」や「抑うつ」と同様交流会開始前で，52 であった。その後の値は数字としては減少しているものの，3 者に有意な差は認められなかった（p>0.05）。気分や感情の状態を表す 6 つ尺度において，唯一平均である 50 を上回る値が生じている。しかしその上回った値もわずかであり，また 3 者に有意な差が認められないことから,「混乱」という観点においても対象者は大きなストレスを感じていないと判断できる。交流会開始前に平均である 50 を上回っていることから，若者との交流をどのようにすれば良いのかといった困惑や,「緊張」や「抑うつ」に誘引される困惑が生じていたかもしれないと考えることもできる。しかし，3 回の調査結果に有意な差が認められていないことや,「緊張」や「抑うつ」との相関性を捉えるのに十分なデータがないために明言することはできない。ここにも追加調査の必要性は感じられる。

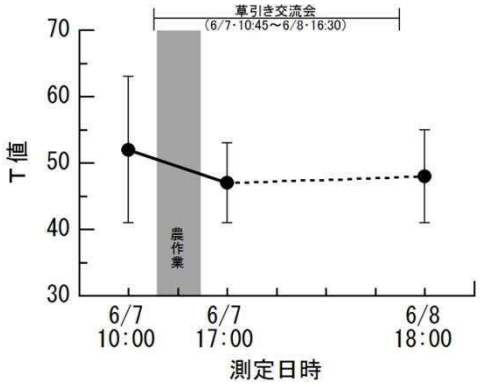

図 9 「混乱」に関するＴ値の時間変化
最後の区間には様々なプログラム項目があり変化していることが予想されるため点線とした

表 8 POMS 短縮版**「混乱」**に関する各調査での T 値平均と標準偏差及び各調査間における相違

	① 6/7・10時	② 6/7・17時	③ 6/7・18時
T値平均	52	47	48
標準偏差	11	6	7
①との相違	－	n.s.	n.s.
②との相違	n.s.	－	n.s.
③との相違	n.s.	n.s.	－

4 おわりに

3 回の調査対象時において，POMS 短縮版で測定できる気分や感情の状態である「緊張・抑うつ・怒り・活気・疲労」の 5 つの尺度はいずれも平均である 50 を下回る結果となった。また残る 1 つである「混乱」に関しても，交流会開始前に 52 と平均をわずかに上回る値を示したが,その他 2 回は 50 を下回るものであった。3 回の時間に伴う変化で有意な差が生じたのは 6 つの尺度のうち「疲労」だけであった。6 つの尺度が概して平均ないし平均よりも低く，また調査間による明確な変化がほとんど認められていないことから，交流会の実施に対して対象者はストレスをほとんど感じなかったであろうと判断できる。

その他の本調査結果での特徴として 3 つのことがあげられる。1 つ目は,「活気」に関して，それほど大きく下回ってはいないものの平均より低い値となったことである。農村振興のイベント内容，類似したイベント内容の実施履歴，受け入れ地域の年齢層などに依存

するであろうが，農村振興が必ずしも地域に大きな活気をもたらすとは言えないということが示唆された。2 つ目は,「疲労」に関してのみ平均以下の変動ではあるものの時間によって有意な差が生じたことである。やはり素手による除草作業をはじめとする農作業という重労働に加え，本交流会のような大学生との交流が疲労感の増加をもたらしたと思われる。このことから大学生との交流含んでいる農村振興イベントの実施にはある程度の疲労感が生じることが十分に予想される。最後の 3 つ目は，本調査において最も興味深い特徴であり,「怒り」の値が 40 前後と平均よりかなり低い数値を 3 回の調査すべておいて示したことであった。これは本交流会における調査対象者の特徴と言ってよいだろう。

この調査結果をそのまま農村振興を目指した交流事業を初めて行った際の地域住民のストレス状況と考えることは危険であるように思われる。調査対象とした交流会は，類似したプログラム内容にて調査対象年の前に既に 2 回実施している。すなわち交流対象とする大学生（剣道部員）との面識は深く，とりわけ剣道部員の 1 年生以外は前年度以前の開催により，すでに知っている面々である。また交流会は年に 1 度しか開催されないが，それ以外にも交流会実施に関する打ち合わせ，うもれ木の郷から剣道部へのすいかの差し入れ訪問，剣道部からうもれ木の郷への試合結果報告や卒業及び進路報告訪問など，年間を通じ何度も交流を図っている。そうした結果として対象者はそれほどストレスを感じなかったと考えるほうが自然であると思われる。本交流会のような農村振興を目指した交流事業の第 1 回目における地域住民の気分や感情の変化としては，本調査結果では有意な差は認められなかったが，開始前には「緊張・抑うつ・混乱」の数値が高くなることを想定してもよいと考える。またイベントの内容に依存するであろうが「疲労」の数値は，終了時にはある程度高くなることが十分に考えられる。結果として，地域住民がある程度のストレスを感じるであろう。

既に記しているように本調査の対象とした交流事業は，調査を行うまでに 2 年以上，そして 2015 年, 2016 年も実施されている。年々民泊を引き受ける家庭が増加し, 2012 年の交流会開始時には難色を示していた地域住民も 2016 年では交流会実施に対して理解を示している。こうした交流会の継続につながる地域住民の意識の変化は，農村振興を目指した交流事業の成功の一例であると言ってもよいだろう。本調査結果である「緊張・抑うつ・怒り・活気・疲労・混乱」の時間によってほとんど変化しないという傾向は，農村振興を目指した交流事業において，地域住民が目指す気分や感情の一つの指針であるように感じる。また本調査において最も特徴的な傾向は，平均より十分に小さく，かつほとんど変化しなかった「怒り」に関するものである。本調査対象とする交流会を「成功」とみなすのであれば，農村振興を目指した交流事業の成功（継続）させるうえで特に重要な地域住民の感情変化の指針は「怒り」の変化にあるのかもしれない。

農村振興を目指すうえで交流事業は一つの手段と言える。交流事業を行う事前や事後に，本調査のような POMS 短縮版などを用いて地域住民の気分や感情の変化をとらえることは非常に有益な事項の一つであると考える。関係者の気分や感情の変化の結果に応じて，次回開催する際の業務分担を行ったり，地域において感情変化に関係する研修などの教育訓練を行ったりすることができるからである。こうした地域の判断や理解，努力が交流事業の継続、ひいてはより有効な農村振興につながっていくものと思われる。

（学生支援センター・講師）

謝辞

本稿に記す交流会及び調査の実施にあたり，福岡大学経済学部の辰己佳寿子教授に多大なご協力を頂きました。また，調査の実施及びその分析に関して山口大学大学教育機構の上田真寿美准教授(現在,国際総合科学部教授)に貴重なご助言を頂きました。本調査の実施に関して，農事組合法人「うもれ木の郷」の山本勉生組合長，田中敏雄事務局長，黒川恵子事務局員，及び「四つ葉サークル」の原スミ子代表をはじめ，宇生賀在住の皆様にはご理解及びご協力いただきました。交流会の実施に関して，中村秀明町長をはじめとする阿武町役場，JA あぶらんど萩，山口県萩農林事務所，山口大学地域連携センター（現在，地域未来創生センター）より多大なご協力を頂きました。皆様に感謝の意を表します。

【参考文献】

伊藤和憲・内藤由規・斎藤真吾・浅井福太郎・皆川陽一，2013,「線維筋痛症患者に対して森林セラピーを取り入れることの臨床的意義」,『慢性疼痛』32（1），123-128.

亀岡市,「亀岡カーボンマイナスプロジェクト」, http://www.6minus.jp/ （2017 年 1 月 5 日閲覧).

金子書房，2005,『日本語版 POMS 短縮版』金子書房.

溝上慎一，2009,「『大学生活の過ごし方』から見た学生の学びと成長の検討」,『京都大学高等教育研究』15，107-118.

文部科学省，2000,『大学における学生生活の充実方策について（報告）～学生の立場に立った大学づくりを目指して～』高等教育局大学における学生生活の充実に関する調査研究協力者会議.

農林水産省，2014,『魅力ある農山漁村づくりに向けて～都市と農山漁村を人々が行き交う「田園回帰」の実現～（活力ある農山漁村づくり検討会中間取りまとめ)』農村振興局活力ある農山漁村づくり検討会.

大西信弘，2014,「保津町（京都部亀岡市）がとりくむ、生きもの共生で町おこし、すいたん農園～いくつかの実践事例の紹介～」,『第 5 回文化と歴史そして生態を重視したもう一つの草の根の農村開発に関する国際会議報告書』5，21-30.

総務省,2014,『平成 22 年国勢調査最終報告書』統計局.

辻多聞，2009,「おもしろプロジェクトによる学びの成果と今後の課題」,『大学教育』6，61-72.

辻多聞，2011,「ＰＢＬによる大学生の成長とそれに伴う大学教育の在り方～山口大学と同志社大学でのアンケート結果をもとに～」,『大学教育』7，16-25.

辻多聞，2014,「世代をこえた相互啓発による地域社会への影響」,『第 5 回文化と歴史そして生態を重視したもう一つの草の根の農村開発に関する国際会議報告書』5，14-20.

氏原学，2013,「中山間地域の商品化の試みとその狙い～高知県大豊町の事例～」,『第 4 回文化と歴史そして生態を重視したもう一つの草の根の農村開発に関する国際会議報告書』4，18-21.

山口大学,「国立大学法人山口大学における個人情報の取扱いに関する方針」, http://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~soumuka/jyouhou/personal/policy/policy2.html （2017 年 1 月 5 日閲覧).

横山和仁・下光輝一・野村忍，2002,『診断・指導に活かす POMS 事例集』金子書房.

横山和仁,2005,『POMS 短縮版手引と事例解説』金子書房.